

あの話、なかったことにしてください。

[先日、駅のホームで聞いたひと言]



STORY STREET

《Vol.100》

人事コンサルタント
本田 有明



100回目の節目に“新装開店”

このたび連載100回の節目を迎えた。当初の目標は50回だったが、そこに到達したら、「100回まで頑張ってください」。そのつど編集部に励まされ、なんとか8年4か月継続することができた。そろそろお役御免かと思っていたら、「装いを新たにしてみよう1周行きましょう!」。

ということで、このようなスタイルで2週目に突入することになった。どこまで進めるかはわからないが、読者諸氏には今しばらくお付き合いをお願いしたい。

数か月前に編集部と打ち合わせをした際に、STORY STREETのタイトルにふさわしく街の中で言葉を拾って、そこから話を始めてはどうかと、その場の思いつきで提案したのは私自身だった。

「おもしろそうですね」と編集部の方も乗ってきた。「ではレイアウトを考えてきますので、次回は居酒屋で楽しく打ち合わせを」とのこと。指定のお店は神保町の「酔の助」。映画『舟を編む』やテレビドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』などでも撮影に使われた、昭和の匂いプンプンの人気居酒屋だ。

迷ったときは一步前に

居酒屋でイッパイは決して嫌いではないが、レイアウトを一新して、というのには正直ちょっと戸惑った。今までの様式に馴染んでいたのも、変えるのは面倒だし、毎月おもしろい言葉を街中で拾えるかどうか自信がない。連載に穴をあけることになったらどうしよう。

弱気になっていたとき、こんな言葉が耳によみがえった。

「あの話、なかったことにしてください」

数日前に駅のホームで聞いた言葉だ。携帯電話を手に中年男性が頭を下げていた。私と同じように、なにか自分で提案したことを後で悔み、帳消しを願い出ているのだろうか。私も同じセリフを口にしたい。一瞬そんな誘惑にかられた。

が、しばらく考えて、その思いを吹き払った。「迷ったときは一步前に」。講演などでそう言い、本にもそう書いてきたのは私自身だった。

たとえばエスカレーターと階段があったら、階段を選ぼう。なにごとにも面倒なこと、しんどいことを選んだほうが、心にも体にも力がつく。新旧ふたつの道があったら、新しいほうを選ぶ。それが私の流儀だったはずだ。

加齢に伴って、その鋭気が弱ってきたのかもしれない。ここはファイト一発、しっかり充電しなければ。

ということで、無事“新装開店”が果たせた。酔の助では大いに盛り上がり、100回目の記念号が出たらまた祝杯を、となった。なんだかイッパイやってばかりいるようだが、そこはご愛嬌として、今後もこのコラムをご愛読いただければ幸いである。